「生徒の主体性を生かした古文指導の実践ー『源氏物語』の場合ー」

吉田佳代

一　はじめに

「おもしろい」授業とは一体どのような授業のことを言うのだろうか。ある生徒は、古典は難しくて覚えることが多いから嫌いだと言う。また、ある生徒は古典を勉強して何の役に立つのだと最初から匙を投げ、学習することを拒否しようとする。そのような生徒たちの態度に、何とか古典嫌いを減らそうと様々な教材の工夫が行われていると思うが、ふとした時に思うことがある。「学ぶ」ということは、本来的に苦痛を伴うものではないのか。本当の「おもしろさ」とは、その苦痛に耐え、自分の力で、難しく、高い壁を乗り越えたときにはじめて得られる達成感や感動をいうのではないか。そして、私たち教師の使命とはその感動や達成感を生徒たちに味わわせることではないのだろうか。

そのためには、生徒が一日の大半を過ごす「学校＝授業」は、自分の力で壁にぶつかり、その壁を乗り越えていく時間でなければならない。つまり、「授業」とは、学習者の主体的な活動を生かした内容読解を目的とするものであり、そこから得られる学習者の感動や、知的世界の拡がりを促すものでなければならない。そういう思いからこの研究が始まった。

二　本校の現状と『源氏物語』指導に至るまで

（一）本校の現状

佐賀県立致遠館高等学校は、県内で最も新しい創立十二年目の、普通科英語コースと理数科を併せ持つ、いわゆる「進学校」である。ほぼ生徒全員が進学を希望しており、学習に対する意識は高いが、生徒の大半は、高校の授業とは「教師が言うこと（板書すること）をノートに写すこと」が「授業」であり、それをきちんと「覚える」ことが「勉強」であり、「理解しているということ」だと信じ込んでいるようである。従って、その考え（丸覚え＝学習という考え）を覆すことから本校一年生の授業はスタートする。その概要は以下の通りである。

はじめての文章を目にして、その時点で生徒が獲得している知識事項を生かし、文章の大意を把握することを授業の目標とする。意味調べ等の予習は課さず、内容に関する学習プリントの予習を課す。それを授業と関連させて使用し、発問に対する生徒の解答

には必ずそう考えた根拠を問う。そうすることにより自分の考えた答えがただの「意見や感想」ではいけないということを知り、また、教師側は極力説明を減らす授業の組立を行うため「自分から積極的に授業に関わり、答えを出していかなければ授業が進まない」という現実を前にする。一年間この繰り返しである。

実際の授業の中で、生徒は試行錯誤しながら根拠に裏打ちされた自分の考えを持つことの難しさを実感していたようだ。しかし、これを何度も繰り返す中で、徐々にではあるが、細かい部分にはこだわらず自分がその段階段階で習得している知識を生かしながら読んでいこうとする姿勢が見え始めた。

また、だからといって教材の中で習得すべき知識事項は決しておろそかにはせず、日々の学習プリント等を作成してその定着をはかり、定期考査等で確認をする。古典の学習において、知識事項の習得は最終的な目標ではないが、内容読解のための「道具」としては大切なものである。そして、以上のような指導を効果的に行うために本校独自の教材を選択・作成し、効率的な指導をはかっている。

(二)『源氏物語』指導に至るまで

二年に入り、それまで様々なジャンルの教材を学習してきたが、『源氏物語』にはいっさい触れておらず、古典文学の最高峰と呼ばれる『源氏物語』の魅力に触れさせたいという思いが担当者の中に生まれた。時期を同じくして、教育センターの高等学校国語科講座の協力校として『源氏物語』「心づくしの秋風」を研究授業として実施することになったので、ならばこの際『源氏物語』を一つの単元としてまとまりを持たせて学習させようということになった。

教材は、まず『源氏物語』についての概論を夏休み期間中に行われる勉強会で講義し、その後「若紫」「心づくしの秋風」を扱う。特に、「心づくしの秋風」については、教育センターの研究授業との関わりで、最終的な目標として「古典作品の鑑賞」ということを掲げ、授業の方法や形態にも普段の授業とは少々違うものを取り入れた。

『源氏物語』についての具体的な実践については次の項に述べる。

三　実践

(一) 夏の勉強会

①指導方針・指導内容

『源氏物語』の概要をつかむことを最終的な目標とする。「光源氏」を基本軸に据え、その成長という時間軸と、様々な人物との関わりという空間軸を交差させて『源氏物語』を大まかに把握させる。あくまで導入なので、人物関係図には『あさきゆめみし』(講談社、大和和紀著作)より引用した絵を使用し、抵抗感をなくすように配慮した。また、講義の流れに沿った学習プリントを準備し、勉強会の終了時には簡単なレポートを課すことを最初の段階で提示し、メモの必要性を伝えた。

②実践

講義の流れは以下の通りである。時間は百分×二コマ。なるべく本文を使いながら、光源氏の一生を追うという形で進めた。中でも、その後学習する教材に関連する部分については他の部分よりも少し詳しく講義した。

I『源氏物語』とは（作品について）
II人物関係図
III内容
　i光源氏の誕生
　　◎光源氏の誕生（冒頭文の提示）　◎藤壺の登場
　ii光源氏の青春
　　◎正妻葵の上　◎中の品の女性ー空蟬・夕顔ー
　　（夕顔巻については朗読テープを聞かせた）
　　◎垣間見から始まる恋愛（失敗編）ー末摘花ー
　　◎紫の上と明石の上　◎理想のユートピア六条院
　iii光源氏壮年期以降
　　◎女三の宮降嫁　◎柏木の女三の宮の密通
　　◎紫の上の死　◎光源氏の退場
　iv宇治の物語
　　◎薫と匂の宮　◎大君・中君・浮舟
　v女の自立

③成果

『源氏物語』の概要をつかむことが目標だったので、レポートも比較的自由に書けるように次の三つを質問した。

1、『源氏物語』全体について思ったことを述べなさい。
2、登場人物の中で印象に残った人について述べなさい。
3、『源氏物語』についてもっと知りたいことを書きなさい。

勉強会で講義を行った普通科英語コースの全員（二四〇名）にレポートを課し、すべて目を通したが、その結果はおおよそ次の三通りに分類できた。

○全く知らないことばかりだったので、講義を聞くことによって概要が分かり、もっといろんな事を知りたいと思った。
○「あさきゆめみし」などを読んで、だいたいは知っていたが、実際の本文に書いてある部分で知ることでより詳しく知ることができ、もっと本文を読みたくなった。
○「あさきゆめみし」などを読んで内容を知っていたので、退屈だった。

全体的に見て、『源氏物語』の概要を知ることができて良かったという意見が大半を占めていたので、当初の目的は達成できたと思う。しかし、中には漫画で読んだことがあるので、退屈だったという意見もあり、授業者としてはなるべく本文に忠実に講義をしたつもりであったが、それが伝えられなかったのはこちら側の反省すべき点であった。そんな中で何よりも収穫だったのは、勉強会終了後にあちこちで『源氏物語』談義に花が咲いていたことである。

これは授業者にとって最もうれしい成果であった。

(二)「若紫巻」

①指導方針・指導内容

教材は「若紫」(光源氏が幼い紫の上を垣間見する場面)を使用。【資料①】語注は学年の担当者で話し合いをして最低限必要なもののみに注をつける。前述したとおり、この単元の最終的な目標として「古典作品の鑑賞」を掲げたため、この教材においても普段の教材とは違った取り扱い方をする。この教材での指導目標として、

①自分の力で本文全体を把握させる。

②本文の細かい表現を意識させる。

ということを設定した。特に、②についての活動を中心に据えて、授業を構成した。

②実践(全5時間)

i 指導上の留意事項

○日ごろの授業の延長である内容読解に基づいて、表現を意識させるために学習プリントを用いて、取り組ませる。

○普段と違い本文の全体把握についてもすべて生徒に任せることにしたので、注釈を少し多めにつけた。

ii 指導過程

【第1次(2時間)】

・辞書を使用しながら、自分の力で口語訳を作る。

・自分が作った口語訳をグループの中で比較をしながら、より精確な口語訳を作っていく。

【第2次(2時間)】

・個人で学習プリントに取り組む。

・グループで学習プリントをつきあわせ、心情の深まりや動きと表現との関連性について考える。

【第3次(1時間)】

・各グループ学習の中で特に話題になったことについて発表する。

③成果

日々の授業は一斉授業の形態をとっている中で、この学年ではじめてのグループ学習を取り入れたために、生徒たちも新鮮味を感じていたようで、積極的に話し合いに参加していた。また、最後の発表の際の発言も、ただの感想ではなく、本文(表現)に基づいたものが出てきたので、当初こちらが意図していた「表現を意識する」ということは達成できたように思う。特に、学習プリントの中の、「涙ぞ落つる。」とあるが、なぜ源氏はここで涙を流したのだろうか。その理由を深く考えて答えなさい。」(本文「さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとやう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも、涙ぞ落つる。」源氏が藤壺を思い出して涙をこぼす場面)については、生徒自身が、自発の助動詞「る」の使われ方に気付き、意図せずに対象を見て涙をこぼしている源氏の心情や、その表現の巧みさについてしきりに感心していた。

また、本文の「限りなう心を尽くしきこゆる人」には注をつけずにいたが、これが暗に「藤壺」を指していることに気付いたのは、勉強会の成果ともいえるのではないだろうか。

(三)「須磨巻」

①指導方針・指導内容

教材は、「須磨」(須磨での侘び住まいの様子を描いている場面)を使用。【資料②】「若紫」の時と同様、語注については学年担当の話し合いで、必要と判断したもののみに注をつける。この教材での指導目標としては

①表現効果に気付かせ、自然の風物に投影された源氏の内面の心情を理解させる。

②生徒一人一人の鑑賞能力を高める。

を設定する。

この場面は、古歌や古詩の引用が多く、教師の説明がなければ、理解を深めにくい部分もあると思われるが、まずは生徒だけの力でどこまで読みを深められるかを見ることにした。

②実践(全5時間)

i指導上の留意事項

○予習として学習プリントを課し、そのチェックをして、個人レベルでどこまで読めているかを確認した上で、授業に結びつける。

○表現を意識させ、源氏の心情と結びつけて考えさせる。

ii指導過程

【第1次(2時間)】

・「表現」に注目して、「鑑賞」を行うことを提示する。
・場面設定をする。
・源氏の心情が一番よく表れていると考えられる部分を探す。
・個人個人が抜き出した箇所について、グループで話し合いをし、本文に基づいて源氏の心情を深める。

【第2次(2時間)】

・源氏の心情を際立たせるもの(源氏の心情に影響を与えているもの)はないか、いくつか挙げる。
・様々な表現の中からいくつかに絞り、それがどのような効果があるのか、グループで話し合う。
・グループで話し合ったことを発表。
・グループでの話し合いをもとに、各個人で鑑賞文を作成。

【第3次(1時間)】

・個人の鑑賞文を発表。
・古歌・古詩の引用について説明し、読みを深める。
・和歌を解釈する。
・「人々」の様子をおさえる。

③授業の実際(第2次)

【指導過程】

	学習活動	指導上の留意点
導入	源氏の心情の確認。	学習プリントを用いて各グループのだした心情を確認させる。
展開	源氏の心情に影響を与えているものは何かを考える。 それぞれのグループが取り上げた表現についてグループごとに発問し、グループで話し合う。 ・波と関連させながら源氏の心情を詳しく述べよ。 ・風は源氏の心情とどんな関わりを持っているか。また、風はどんなものの比喩と考えられるか。 ・琴の音色や、琴を弾くという行為は源氏の心情とどんな関連性を持っているか。	「秋」「風」「琴」などの音が影響していることに着目させる。 机間指導する。
まとめ	話し合った内容を各自のプリントに記入し、代表者は板書する。 次時にグループの代表者にポイントを発表してもらうことを指示。	

④成果

古歌や古詩については最終的には説明をしたが、最初の段階ではいっさい触れずに授業を行った。生徒たちは与えられた文章とそれまでに獲得してきた知識を頼りに、何とか自分たちで表現の効果に気付き、本文が表現している世界の多重性に気付くことができた。しかし、グループ学習においては、生徒の積極的な取り組みは期待できるものの、生徒の誤読をそのままにしておく可能性もあるので、慎重な授業運びが必要となる。

四　研究成果と今後の課題

「古典作品の鑑賞」ということを指導目標としてはじめて授業を行ったが、授業者自身が「鑑賞」と「読解」の関連性や相違について、確固たる見解を持たないまま授業を行ってしまったので、生徒がどこまで到達すれば、古典を鑑賞したことになるのか、内容読解との違いはどこなのか、などの疑問や迷いが最後まで残ることになってしまった。ただ今回の一連の授業で分かったことは、「鑑賞」とは決して読者の独りよがりな感想で終わってしまってはならない。精確な読解によってはっきりと見えてくる作品世界と、読者自身の世界がぶつかり合ってはじめて生まれる読者の感動表現の世界こそが「鑑賞」ということではないのだろうか。

「鑑賞」をするためには様々な力が必要となる。それは、内容読解力であり、自己の内面を見つめ、自己を知る力であり、自己を表現する力である。それぞれの力は一朝一夕に育成できるもの

ではないので、日々地道にやっていくしかないのであるが、これらを徐々に達成していく中で感じるものこそが本当の「おもしろさ」なのではないだろうか。

実際に授業を実施してから、約一年が過ぎようとしている。受験に向けてあわただしい毎日を過ごしている生徒たちに、アンケートを採り、この二年半を振り返って次の三つの質問をした。

【質問①】二年次に学習した『源氏物語』について質問します。「勉強会・若紫・心づくしの秋風」と、普段の授業とは少々異なる形態で授業を行いましたが、一年たった今どういうことを覚えていますか。またはどういう印象を持っていますか。自由に答えて下さい。

【質問②】『源氏物語』においては、はじめて「鑑賞」というものをしましたが、どうだったでしょうか。覚えている範囲で構いませんので、自由に述べて下さい。

【質問③】本格的に古文を学習し始めて三年目になりますが、三年間を振り返るつもりで自由に述べて下さい。

解答の一例を挙げておく。

【解答①】

・源氏とそれを取り巻く女性の関係や人柄を中心に授業があったことを覚えている。（男）

・人間がたくさんでてきたのを思い出す。しかし、その人たちの背景といったものは皆複雑で、一人一人違った面が主人公を中心によく表れているということを考えた。（男）

・普通の授業の形態とは違って源氏物語を漫画のような絵を見たり、話を聞いたりして古文が私たちからかけ離れたものではなく身近で読みやすいもののように感じて楽しかった。（女）

・平安時代の人が、こんなに長い間読み続けられる大作を書いたことはすごいと思う。文章の書き方も本当らしくて作り話ではないかもと思った。（女）

【解答②】

・一つの文章でも、人によってそれぞれ違う感覚があって広がりを感じることができた。現代文にしろ、古文にしろあまりかわりがないということを感じた。（男）

・あの頃はあまり文法とか単語の力とかがなかったので、いつも通りの授業が良かったと思ったけど、今はおもしろかったし、またそういう授業をやりたいと思った。（女）

【解答③】

・今、読める文章とそうでないものがはっきりしてきた。ただ、読めなくても全部が読めないのではなく、つながりが分からなくなってしまうことが多い。（男）

・今でも古文は苦手ではじめて見る文章は自分だけではなかなか読んで内容が把握できないけど、これからも勉強を続けて、頑張って読みたいと思う。（女）

・はじめて古文を読んだときは日本語なのに、英語より分からない気さえした。こんなのほんとうに読めるようになるのか不安だった。いろんな知識や文法なんかを増やして少しずつ読め

るようになってうれしいです。読めるとおもしろいですよね。（女）

・はじめのうちは、やっぱり抵抗があって、苦手意識もあったけど、いつからか自然と何とかとばしながらも全体をつかむようにする癖はついてきたなと思った。（女）

アンケート結果①②からは、普段とは違う形態で行った授業だったため、印象に残っているということが分かる。また、友人との話し合いの中で、自分の考えの広がりや、深まりを感じることができたという意見も出てきた。

また、アンケート結果③より、かなりの生徒がはじめて目にする文章を読むと言うことに関して悪戦苦闘していることが分かる。しかし、決して途中で投げ出さず何とかして読んでいこうとしている姿勢が生まれていることも事実である。授業の中ではその過程を大切にしていきたいと思う。

とはいえ、受験を控えた高校三年生が受験科目の一つである、「古典」を大切なものとして捉えるのは当然といえば当然かもしれない。進学に対する意識が高ければ高いほど、それを目の前にぶらさげて生徒をひっぱっていくことは至極簡単なことかもしれない。ただ、今私が目の前にしている現実は「受験のための勉強」や「将来確実な職に就くための大学選び」に少なからず疑問を抱き始めている生徒たちの姿である。そんな生徒たちに「受験」という言葉は何の特効薬にもならない。「授業」が生徒たちにとって、より身近で自分たちの知的好奇心を満たしてくれるものでなければ、生徒たちはますます「学校」から離れていってしまう。

そういう意味では、指導者にとっても学習者にとっても非常にシビアな時代になりつつあるのではないだろうか。指導者にしても、指導書に頼りっきりの授業では生徒の主体性を引き出して、知的な感動を与えることは難しいだろうし、学習者にしても自分から何かをつかもうとしなければ、本当には何も手に入らない、そんな時代が到来しつつある。しかし、だからこそ本当の意味での「おもしろさ」を実感できたときには、何か新しい自分が見えてくるかもしれない。

五　おわりに

日頃、生徒たちの無関心な態度を見て、つい「受験」をたてにしたくなるときがあるが、その生徒たちの態度は、裏を返せば指導者側の問題でもある。生徒たちに学ぶことの苦しさ、そしてそれを乗り越えたときに得られる「おもしろさ」を実感させ、「授業」に生徒たちを連れ戻すためには、指導者の教科指導における力量が絶対的に必要となる。そのことを改めて考えさせられた今回の研究であった。

（佐賀県立致遠館高等学校）

資料①

平成十年度二年二学期古文教材『源氏物語』――若紫巻――

源氏は十八歳の時、「わらはやみ」にかかり、その治療として山籠もりの聖の加持を受けるべく、都を離れ京都北山に赴く。そこには、都から遠く離れた山でありながらも趣深く住みなしている住まいがあった。この場面は、源氏が一旦ここを訪れ、その後再びこの場に赴いた折りに、この住まいの「小柴垣」に目を留めた場面である。

日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ちいでたまふ。人々は帰したまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたまひて、おこなふ、尼なりけり。簾少し上げて、花たてまつるめり。中の柱によりゐて、②脇息の上に経を置きて、いとやましげに読みゐたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに、やせたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりも、こよなう今めかしきものかなと、あはれに見たまふ。

きよげなるおとな二人ばかり、さては童べぞ、いで入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、③山吹などのなえたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて、うつくしげなるかたちなり。髪は、扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりなして立てり。「何事ぞや。童べと腹立ちたまへるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。「すずめの子を犬君が逃がしつる。⑤伏籠のうちにこめたりつるものを。」とて、いとくちをしと思へり。このゐたるおとな、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。からすなどもこそ見つくれ。」とて、立ちてゆく。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。おのが、かく今日明日におぼゆる命をば、何ともおぼしたらで、すずめ慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く。」とて、「こちや。」と言へば、⑥いゐたり。つらつきいとらうたげにて、まゆのわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、⑦まもらるるなりけり、と思ふにも、涙ぞ落つる。

尼君、髪をかきなでつつ、「けづることをうるさがりたまへど、をかしの御ぐしや。いとはかなうものしたまふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを。⑧故姫君は、十ばかりにて殿におくれたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりしぞかし。ただ今、おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ。」とて、いみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

⑨生ひたちむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

またゐたるおとな、「げに。」とうち泣きて、

はつ草の生ひゆく末も知らぬまにいかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも、端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将の、わらはやみまじなひにものしたまひけるを、ただ今なむ聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ、知りはべらで、ここにはべりながら、御とぶらひにもまうでざりける。」とのたまへば、「あないみじや。いとあさましきさまを、人や見つらむ。」とて、簾下ろしつ。「この世にののしりたまふ源氏、かかるついでに見たてまつりたまはむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へ忘れ、よはひのぶる人の御ありさまなり。いで、⑩御消息聞こえむ。」とて立つ音すれば、帰りたまひぬ。

(注) ①権光の朝臣…光源氏の乳母子で、源氏の為に働き、源氏も心を許している存在。　②脇息…ひじかけ。　③山吹…衣服の色合いのこと。「襲の色目」。裏が薄朽葉、裏が黄色。　④なめり…元々、「なるめり」だったのが、撥音便化して「なんめり」となり、その「ん」が無表記になったもの。読むときは、「ん」を補って読む。　⑤大君…遊び相手の童女の名前。　⑥伏籠…香炉の上にかぶせ、これに衣類をかけて香をたきしめるためのかご。　⑦例の、心なしの…いつものように、うっかりものが　⑧故姫君…尼君の娘。　⑨生ひたちむ…成長する。　⑩消息…訪問する。挨拶する。　⑪罪…仏道でいう、生き物をいじめる罪。　⑫髪ざし…髪の生えぎわ。　⑬いゐたり…ひざをついて座っている。　⑭ねびゆく…成長していく。　⑮故姫君…尼君の娘で、女子の母親にあたる人。に死に別れた。　⑯かからぬ…「かく＋あらぬ」の変化した形。　⑰が…接続助詞で「原因・理由」（～ので）を表す。　⑱生ひたちむ…成長する。　⑲まもらるる…見つめられる。　⑳ゐたるおとな…少納言の乳母を指す。

資料②

二年二学期古文教材（2）　源氏物語　須磨―心づくしの秋風

時勢が変わり、京に身の置き所がなくなった源氏は、愛する女性たちに別れを告げ、わずかな供を連れて、遠路須磨へと下った。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹きこゆるといひけむ浦波、よるよるはげにいと近く聞こえて、またなくあはれなものは、かかる所の秋なりけり。　御前にいと人ずくなにて、うちやすみわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方のあらしを聞きたまふに、波ただここもとに立ちくるここちして、涙おつともおぼえぬに、枕うくばかりになりにけり。琴をすこしかき鳴らしたまへるが、われながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

　　恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ

とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたうおぼゆるに、しのばれで、あいなう起きゐつつ鼻を忍びやかにかみわたす。

○「心づくしの秋風に」――『古今集』巻四、秋上「このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」（葉の落ちた木の透き間からさしてくる月の光を見ると、夏はすぎた、物思いの季節、秋が来たと思う）から の引用。
○「行平の中納言の関吹きこゆるといひけむ浦波」――『続古今集』巻十　雑歌　（　）源の国すまといふ所にはべりける時よみはべりける　中納言行平）「旅人は秋涼しくなりにけり関ふきこゆる須磨の浦風」（関を越して吹いてくる須磨の浦風が、旅人の袂を吹き通して、涼しさが感じられてきた）という歌が見える。　ただし、この歌は「浦風」で「浦波」と合わないので、次の歌も古来ひかれている。『新古今集』　巻十七　雑中　「秋風の関よりこゆるたびごとにこゑうちそふる須磨の浦波」（秋風が関を越えて吹くにつれて、そのたびごとに物悲しく、須磨の浦に打ち寄せる波の音が、その風のひびきに和する）　しかし、これは主従思慕の歌であり、本文の記述には合わない。
○「枕をそばだてて」――『白氏文集』巻十六に「遺愛寺の鐘は枕をそばだて、聴き」とある。「枕を頭からおこして」という意味。

学習プリント

一、本文を読んで、「須磨」とはどのような場所だと考えられるか、説明をしなさい。また、この場面の季節・時間帯はいつだと考えられるか。

二、この文章は、どのような話だろうか、わかる分だけで構わないので、書きなさい。

三、この文章全体を読んで、どのような印象を受けましたか、感じたことをそのまま書きなさい。

四、本文の描写・表現の中で、印象に残ったところはどこか、書きなさい。

五、本文を読んだ印象と本文の表現における印象を見たときに、それぞれに何らかの関連性がないだろうか、考えてみよう。